

いメッセージを發出していただくことを切に要望いたしました。発言を終わります。

○回長(山田俊男君) 大変ありがとうございます。

以上で公述人の方々の御意見の陳述は終わりました。

これより公述人に対する質疑を行います。質疑及び答弁は着席のまま結構でございます。

○堀井巖君 ありがとうございます。自由民主党の堀井巖と申します。

四人の公述人の皆様には、貴重なお話し、誠にありがとうございました。

私も、それぞれの方からの貴重なお話しに思いを共有しながら、お話を聞かせていただきました。

また、本日午前中、JA福光さんの方にお邪魔をいたしました。道中、非常に果てしなくというんでしょいか、広がる水田風景、本当に息をのむような風景が広がっております。私の地元は奈良県でございますが、あれだけ広々とした水田風景なかなかありませんので、今日は本当にその点でも感銘を受けました。

また、それにも増して、JA福光におかれては、地域の農業の中核として集約化を進め、そして集落営農を進め、農業者の方々、地域の方々、信頼関係を構築しながら、地域の将来のために、そして地域農業の将来のために努力をしておられるということを目の当たりにいたしました。改めて感銘を受けた次第でございます。

時間もございませんので、早速質問に入らせていただきます。

まず、細田公述人にお伺いしたいと存じます。細田公述人におかれても、御自身の地域農協のお取組もお話しいただきながら、特に水田地帯の富山県におきまして米を中心にずっとやってこ

られていた。しかしながら、この日本の国内市場、米価は非常に下がっていく。そういった中でどうしていくかというときに、先ほど六次産業化、特に米の輸出ということいろいろ苦労しながらやっておられるというお話がございました。

今後、私は、農林水産省の方も、政府の方もそうだと思いますけれども、何とかこの日本の水田フル活用ということを進めていく中で、米を例に取れば、輸出米ということのように広げていったらいいかというのには非常に大きなポイントになるのではないかとこの時代は開拓していかないと、その辺のお取組について今後をどうのように見ておられるか、またこういった点は政府の方でもしっかりとサポートしてもらいたいとお話がありましたら、お伺いしたいと存じます。

○公述人(細田勝二君) 輸出米についての質問であります。今取組んでおられるのは、昨年の「クローズアップ現代」の資料にもありますように、途中でせつかくつくり上げたものはやめたくない、やはりこれからこの時代は開拓していかないと、先ほど言いましたように、国の力もかなり大きいわけでありまして、日本食のブーム、そしてすしブームをつくり上げていただいております。そういう面でも、これからは是非進めていかないと、やはりそういうふうに思っております。ただ、やはりそんな簡単な問題ではないという面、先ほど言いましたように、WTO抵触の問題からいろいろあります。今、そしてまた、国の方でもかなり農産物の輸出、ひとつ上げていこうということの取組が昨年からつくり上げられております。

実は、その輸出の部会が幾つもできておりますが、農水省に、私はコメ・コメ加工品の輸出部会に委員として、部長として入っております。年四回ぐらいのその会議にも出ておるわけでありまして、元々やはり日本が弱かった、産地はばらばらに日本の米を売ろうというの、牛肉でも、農産物全てでありますけれども、ところが、海外のやり

方はやつぱりその国が一本になったような売り方をしてくるといふ面において、やはり産地競争が余りにも強いと、日本は。

そういう面でも弱いという面において、農水省の方でオールジャパン体制をつくらうということでも進めておられますので、私もその部員に入っておりますが、十分そこら辺を活用しながら今後一層拡大していきたいと、このように捉えて、本音は、四百トンに百トンプラスしたというのが実態であります。今、私も全米輸、六農協で作っておりますけれども、今おおむね大体千三百トンほどであります。今後まだまだ拡大していきたい

ただ、問題は、長くなって申し訳ありませんが、ヨーロッパどこへ行きましても、今、すし、握るものについては大変おいしいすしであります。ただ、店、スーパードパートに売っているすしは全体的において、食べられた方おられると思うんですが、一晩冷蔵庫に置いたばかりの状態です。それが本場にすしかと思われような状況でありますけれども、外国ではそれがすしだと捉えられるのは一番寂しく思うわけでありまして、関税の問題ばかりでなしに、やはりそういった、その国は、すしは冷蔵庫に六時間置かぬと販売できないよというふうな、非関税障壁的な問題もかなり多いわけでありまして。

こういったものは私も輸出しておる者の力では到底できないわけでありまして、こういったものは国のレベルで、やつぱり非関税障壁を、今後あればひとつ力になつてもらいたいなど、そういう面も思っております。私も今一番狙っておりますのは、初めからでありますけれども、日本の営業者、仕事の関係がかなり世界中にたくさんおられます。その一番集中したところを中心

に今展開してござる、そこらから出発して広げていきたいということ、今年目に入つておるといふ状況であります。今後とも、また力をお借りし

たいなと思うわけがあります。次に、鍋嶋公述人にお伺いしたいと思います。御自身の農業の取組についても大変興味深く聞かせていただいて、質問もしたいんですけども、そちらの方はちょっと今日時間がござりますので、農業委員会の関係について一つお伺いをしたいと思います。

先ほどの南砺市でもそうだったんですが、先ほどの御説明のように、合併の関係で南砺市さんでも元々百十七名であった農業委員の方が二十八名に激減したということで、全国でも最小の、今、農業委員、県全体でもだというふうに向っております。これは、もうこれまでに、既に恐らく今回の富山県の農業委員会の方々はもう既に実践をしてこられたのではないかとこの富山県でいろいろ苦労しながらやってこられたことというのは非常に示唆に富むのではないかとこの富山県でいろいろ思っているところでございます。

その中で、公述人の方で一言、今回の改革に期待しているという、期待というお言葉もお使いになられた。で、今まで様々なところで我々、今回の改革についての要望あるいは懸念も含めて様々な話を聞いてきたところでございますけれども、その期待という部分というのはどういったところの一つ見出しておられるのかというのについてお伺いしたいと思います。

○公述人(鍋嶋太郎君) 答えたいと思います。私は、よく農業会議の方で二丁目一番地の問題は選挙ですね。公選制から選任制になったということが出ました。これについては、選任制でいくんだけど、あくまで公選制に近い形のものでやってほしいということがございます。

私自身、平成十四年から農業委員になっておりますけれども、その間、選挙はございませんでした。そういうところで、全国的にも大変少ない選挙の中で、私は、公選制でなくちゃならないとい

八部 農林水産委員会会議録第十五号(その二) 平成二十七年八月十八日【参議院】

う部分は、私はもう当初から、これはなくてもいいんじゃないかなというふうには私は思っておりません。

○堀井巖君 ありがとうございます。これは農業委員会は、皆さんが見られて風通しのいい、皆さん誰が見ても農業委員はしっかりやっていると、それからいいますと、数のことについても、地域から一名であれば、これは当然許されるべきというか、その半数云々じゃなくて、地域から一名であれば、私は、農業委員会の中の意見なりそれから許可についても公正が取れるんじゃないかというところで、私はこれから期待される農業委員会になるのではないかなというふうに思っています。

以上です。

○堀井巖君 ありがとうございます。

次に、宇川公述人にお伺いしたいと思います。

今回、農協法等のこの改革が出てきた背景で、政府の方の説明にもいつもあるのが、やっぱり今の日本の農業、特に平均年齢が六十代後半になってきている、後継者についてもやっぱり真剣にこれから考えていかないといけない、あとは農業者の所得をしっかりと増大していくんだという、こういう話がございます。

そんな中で、言わば青年農業者として農業に入ってこられて、そしてしっかり引き継がれて、また地域のリーダーとして活躍されておられることを心から敬意を表して、お話を承った次第です。

それで、お伺いしたいのは、こういった若手の方々、若い人たちをこの農業の世界にどんどんと入らしてきてもらうには、こういったところでのサポートが必要なのかということについてお伺いしたいと思います。

私の地元奈良県でこういった若い青年農業者の方と話ししますと、例えば二代目とか三代目とか、農家で生まれ育った人たちの子供たち、もともと支えてあげた方がいいんじゃないかとか、先ほどの例ですと、例えば農機具の例があっ

たかもしれません、いろいろふだん感じておられる中で、若い人たちに農業にもっと入ってきてもらおうと思つたときにはどういったサポートが大事と思われるか、お伺いをしたいと存じます。

○公述人(宇川純矢君) 御質問ありがとうございます。

先ほども言いましたが、農機具が大変高騰しているという状況下で、最低、例えば四ヘクタールの水田農業をしようというふうにしたときに、二十万ぐらいの投資がどうしても必要になります。これを、若手農業者、例えば高卒、専門学校卒、大卒でもいいですけども、そのお金を用意できる人間は少ないと思います。あと、農地を借りることも、なかなか信用がなく難しいという現状もあり、その辺をまずクリアしないことには難しいんじゃないかなと。あと、少し軌道に乗ったときに、機械の支援であったりということも最初は受けられますが、途中からそういう支援政策みたいなものがないということもあって、思い切ってお金を借りるといっても難しい、けど、順調にいったらとって支援がないというふうな現状がやはりちよつと見受けられるんじゃないかなというふうに思います。

あと、今更ということもあるのかもしれないですが、やはり米価がしっかりと確保されて、自分たちは安定した収入があつて初めて美しい水田というものを維持できる、そして消費者の方に喜んでもらえる、そういうお米を作りたいなというふうな気持ちでいますので、今の国際競争力という言葉は、決していいものを作るといふ意味とはちよつと受けられない、安いものを作れというふうにしかなれない、そんな中で果たして農業に希望を持てるのかというふうなこともちよつと思つておりました。

やはり、最後にいろいろ言いましたが、支持される、皆さんに買ってもらえるというふうな、そういう農業者になりたいなというふうな思つておられますので、そういうこともやっぱり、本場に

所得の安定した確保というものがいいことにはつらいだけの仕事というふうに見受けられてしまふというふうな思いです。よろしくお願ひします。

○堀井巖君 ありがとうございます。

次に、穴田公述人にお伺いしたいと存じます。

公述人におかれましては、全中の自己改革案の御検討等の中核的な御活躍をしてくられたということで、敬意を表しております。また、私、そういった自己改革案については様々な形で勉強をさせていただきました。現場の声に即した非常に貴重な提言、数多く含まれているように私は感じているところでございます。

そこで、一点お伺いしたいんですけれども、准組合員の利用制限の問題でございますが、私は、これ五年後に見直すということになりますけれども、今後のこの地域農協が、今回の法律案、地域農協がとにかく元気になつてもいいという趣旨での改革ということでありまして、地域農協にとにかく最大限発展いただくように頑張つていただくと。そうした場合に、これは構造的にどういった事業が伸びてきて、どういった事業で例えばこの営農指導を支えていくというような、地域農協がフルに頑張つたときに、構造上この正組合員と准組合員というものの比率というのはどういふふうになつていくのかということについてどのように見通しておられるか、お伺いをしたいと存じます。

○公述人(穴田甚朗君) ありがとうございます。

地方のこれからの流れを見れば、もちろん農業振興を徹底してやらなきゃならぬわけでありまして、どんどん人口が減少なつてきて、いわゆる生活インフラがままならぬようになる事態になりやせぬかと思つております。

そこで、我々JAグループとすれば、これから将来のことを考えれば、准組合員は、単に正組合員、准組合員という対比ではなしに、やっぱり准組合員も地域の農業とそれから地域の活力を支える一緒の仲間なんだと、そういうことで、農協

はやつぱり准組合員の加入促進をしていこうということでもあります。

具体的にはどうするかということなんです。具体的には、例えば皆さん方は、多分お考えは、准組合員は農協の信用事業とか共済事業を利用したいから組合員になるんだろうということですが、今までもそういう面もあったかもしませんが、でも、決してそういう面もあつたかもしないです。特に、例えば地産地消という面からいけば、まず率先して准組合員が地域の農業振興に関わる、地域の地産地消でやる、そういうことをJAが仕向けていくと。そうすることによって、私は、准組合員は農協の事業に対して積極的に協力をしてくれると。特に、農業協同組合というのは加入、脱退の自由が原則でありますから、そんな、准組合員が自分のためになつてくれないもので組合員になるわけないわけです。

だから、やっぱりそういうことが、対応してくれれば自動的に組合員を脱退するわけでありまして、あえてここで准組合員の利用制限とかそういうことをするというのが私はどうしても納得いかないということなんです。そういうことです。

○堀井巖君 ありがとうございます。

○徳永エリ君 民主党の徳永エリでございます。

今日は、四人の公述人の皆さん、大変お忙しいところお運びいただきまして、貴重なお話を聞かせていただきましたことに、まずは心から感謝を申し上げます。

私は、今日初めて富山県に入らせていただきました。米どころ富山ということで、途中、日に輝く田園風景を見ながら、本当に美しいなと思うと同時に、ちよつと重苦しい気持ちになりました。私の地元北海道も、昔は米の不適地と言われたんですけれども、今は米どころになりました。大変なやつぱり農協の皆さんや組合員の皆さんの努力があつたからこそ、ここまで来たんですね。

この何年間かを振り返りますと、突然の水田農